

20250315初稿版 合唱「ふるさと四季」ナレーション・語り台本

洲浜 昌三 作

合唱

ふるさとの四季



令和7年6月29日 大田市民会館中ホール

合唱 大田混声合唱団

ナレーション・語り・大田市演劇サークル劇研「空」

出演者・スタッフ

(必要なら書き加えてください)

合・唱：大田混声合唱団

指揮：茶谷垣内 隆

ピアノ：

合唱：

ナレーション・語り：大田市演劇サークル劇研「空」

A

B

C

D

照明・音響：市民会館スタッフ

舞台監督：

台本作成：劇研「空」・洲浜昌三

合唱「ふるさとの四季」ナレーション台本について

この台本は、大田混声合唱団と劇研「空」のコラボレーション用に書いたものです。公演は「生涯学習まつり」と題して十数団体が参加し、大田市民会館中ホールで発表する予定です。「サンレデー大田」が閉館になり、市民会館の管轄で「生涯学習エリア」という部所ができ、三十八団体が登録。初めてのステージ発表です。

2月初旬に茶谷垣内さんから「ふるさとの四季」という題で十一曲の童謡を発表したいのでナレーションを考えて欲しい。「空」とコラボできないか」という依頼があり、え？と思いながら〇しました。

以前から歌がたくさん入った劇を作ってみたという考えがありました。歌が大好きで学生時代は歌声運動の真っ盛りで、よく歌いました。歌詞の本もたくさんあります。ぼくの「人生の風景は歌とともにあり」です。

そういうことで、「死を前にしたある母の人生が歌とともに展開される」劇を書いてみたいという夢があったので、茶谷垣内さんに、立ち話で漏らしたことがありました。

〇としたものの、簡単ではありません。自由な発送で自由に書くわけにはいきません。制約があります。歌と順番は決定しています。発表時間は二団体で二〇分以内。歌だけで最低一六分。合唱団は約二十人。どんな形式で書くか考え続けていたとき、ふと映像を併用することを思いつき、書く視点とスタイル、内容が決まり、背景を調べながら書き上げました。

あくまで歌が主体で語りは従です。「空」のメンバーの意見も取り入れて修正追加して書いていますが、場合によっては更に削除や修正が必要なこともあります。特に時間の問題、映像使用不可の場合など、臨機応変に対応したいと思っています。

ここで歌われる歌は明治、大正時代に作られ、今でも親しまれている童謡です。時代は大きく変わり、歌も時代に連れて流行り廃れていきますが、日本の四季を歌った童謡は私達の心の故郷を象徴した歌として歌い継がれ、これからも大切に歌い継がれていくだろう…ということをテーマにして台本を書きました。(20250415 洲浜)

合唱 「ふるさとの四季」 ナレーション。語り 令和7年4月第一稿版（追加修正などあればいつでもどうぞ。洲浜）

映像・メモ等記入

←

司会者

A

※A、B、C、Dなどは仮の設定。検討して分担する。一人の場合もあり得る。明るく、語りかけるように。
※冒頭二行は司会者がいない場合は、Aが担当する。映像画像は追加変更可能。使用しない場合もある。
こんにちは。お忙しい中、ようこそおいでくださいました。これから「故郷の四季」と題して、懐かしい歌の数々を、大田混声合唱団のみなさんと、太田市演劇サークル劇研「空」のナレーションと語りでお届けします。どうぞお楽しみください。

「歌は世につれ、世は歌につれ」という言葉があります。時代が変われば、新しい歌が生まれ、その新しい歌がその時代の空気を作っていくという時代と歌の関係を表した言葉です。

（戦争の時には、戦意高揚を高めるために力強い歌が次々と生まれました。

戦後には希望を感じさせる 歌が生まれました。

世界との交流が盛んになるとジャズ、ロック、フォークソングなどが流行しました。令和の時代になると、

J-POPとかK-POPというテンポの早い歌が流行っています。（みなさん、ついていきますか？）

最近では、演歌を歌えば、「昔の人」という目で見られます。まさに「歌は世に連れ、世は歌に連れ」です。

でも、時代が替わっても、変わらない歌があります。…何でしょう？…。童謡です。

B

日本の童謡は、「子どもたちの遊び歌」として始まったと言われています。「花いちもんめ」とか「かごめかごめ」などですね。

大正時代には、北原白秋や野口雨情らが文学的な詩を取り入れ、童謡の黄金時代を築きました。昭和時代には「赤とんぼ」や「うれしいひなまつり」など、親しみやすい名曲が多く生まれました。

① 故郷

テレビやアニメの影響を受けて童謡も多様化していますが、伝統的な童謡は、時代を超えてみんなに愛されています。それは、私達の「心の風景」でもあります。
では、「春の歌」から四曲を紹介しましょう。」

② 春の小川

「ウサギ追いかのやま」と歌うと、「ウサギは美味しいの？」と聞く子どもがいるそうです。
実は、私も子どもの時に、そう思った一人です。みんなでウサギ追いをしたなんて信じられません。
小川で小ブナを釣ったこともありません。「つつが なし」とは何のことか知らずに歌っていました。
でも、思わず胸に込み上げてくるものがあります。

雪が消えて厳しい冬が終わり、春が訪れてくると、小川の岸边に綺麗なスマイレやレンゲが咲き、澄み切った水がサラサラと流れて行きます。私たちの心の中には「なつかしい 春の小川」が流れています。

③ 朧月夜

黄色い菜の花が咲き乱れる畑。夕日が傾き、見渡す限り山々の際に霞が深まり、いつのまにか空には月がかかっています。田植えの仕事を終えた人たちが田んぼの中の道を帰って行きます。あちこちでゲロゲロゲロガーガーと一斉にカエルが鳴きはじめ、遠くからお寺の鐘の音が、暮れていく静かな村に長い尾を引いて流れていきます。空には霞が掛かったような丸い月が浮かんでいます。春の朧月夜です。

④ 鯉のぼり

山里に、赤い瓦が波のように連なり、空には雲が波のように浮かんでいます。爽やかな橘の香りが朝の風に乘って流れてきます。空高く泳いでいるのは「鯉のぼり」です。子どもたちには、その鯉のように広い世界で伸び伸びと育ってほしい・・・そんな願いを、親たちは鯉に託したのでしょうか。

では、ふるさとの四季・「春の歌」から「故郷」「春の小川」「朧月夜」「鯉のぼり」をお楽しみください。

春の歌4曲

① 「故郷」

① 「故郷」 作詞：高野辰之 作曲：岡野貞一（1914、大正3年尋常小学校6学年用）

① 「故郷」

一、うさぎ追いし かの山
小ぶなつりし かの川
夢は今も めぐりて
忘れがたき ふるさと

② 「春の小川」 作詞：高野辰之 作曲：岡野貞一

② 「春の小川」

② 「春の小川」

一、春の小川はさらさら流る。 (いくよ)
岸のすみれやれんげの花に、
にほひめでたく色うつくしく (すがたやさしく)
咲けよ咲けよと ささやく如く (ささやきながら)
二、春の小川はさらさら流る。
蝦やめだかや 小鮒の群に、
今日も一日 ひなたに出でて
遊べ遊べと ささやく如く。

③ 朧月夜

高野辰之作詞、岡野貞作

④ 「鯉のぼり」

③ 「朧月夜」

一、菜の花畠に 入日薄れ
見わたす山の端 霞ふかし
春風そよふく 空を見れば
夕月かかりて におい淡し
二、里わの火影も 森の色も
田中の小道を たどる人も
蛙のなくねも かねの音も
さながら霞める 朧月夜

④ 「鯉のぼり」 作詞：不詳 作曲：弘田龍太郎

④ 「鯉のぼり」

一、蕩（いらか）の波と雲の波、
重なる波の中空（なかぞら）を、
橘（たちばな）かおる朝風に、
高く泳ぐや、鯉のぼり。
二、
開ける広き其の口に、
舟をも呑まん様（さま）見えて、
ゆたかに振う尾緒（おひれ）には、
物に動ぜぬ姿あり。

大正〃年「尋常小学唱歌五学年用に初めて
掲載され、文部省唱歌として歌われた
三、百瀬（ももせ）の滝を登りなば、
忽（たちま）ち竜になりぬべき、
わが身に似よや男子（おのこ）と、
空に躍るや鯉のぼり。

「こいのぼり」近藤宮子作詞 昭和6年
やねより たかい こいのぼり
おおきい まごいは おとうさん
ちいさい ひごいは こどもたち
おもしろそうに およいでる

唱団照明Ⅱ ナレーター照明Ⅱ、

合唱が終わるとピアノの曲が流れ、それをバックにナレーション(予定)自然な会話。アドリブもOK。

懐かしい「春の歌」…いかがでしたか…今の歌は4曲とも、大正時代のはじめに作られた歌です。

大正といえ、大正元年が1912年…百年以上も前です。その頃作られた歌が、今もみんなに歌われて
いるって、凄いことですよ。

だけど、「こいのぼり」と言ったら、子どもたちは、別の「こいのぼり」を歌うんじゃないの？
という？

「やねより たかいこいのぼり 大きいまごいは おとうさん…」

その「こいのぼり」は昭和6年に近藤宮子っていう女の人が歌詞を作ったらしいの。

ふーん、昭和だから言葉も今の言葉に近いんだね。

そうかもね。大正時代の「鯉のぼり」の三番は難しいもんね。「百瀬(ももせ)の滝に登りなば、

忽(たちま)ち竜になりぬべき、わが身に似よや男子(おのこ)と、空に躍るや鯉のぼり」

ねえ、ねえ、童謡は子どもたちの遊びから起こったというけど、どんなものがあるかな？

例えば…ほら、「せっせっせーのよいよいよい」(二人で手遊びしながら歌う)「お寺の和尚さんがカボチ

ヤの種を蒔きました 芽が出てふくらんで 花が咲いたら じゃんけんぽん」。おもしろいね。

「茶摘」もそうじゃない？

そうだね。久しぶりにやってみようか。「夏も近づく八十八夜 野にも山にも若葉が茂る

あれに見えるは茶摘ぢやないか あかねだすきに菅(すげ)の笠

八十八夜っていうのは立春から数えて88日目の日のことです。毎年5月2日頃がこの日にあたります。この日を堺にやがて立夏…夏がはじまる。家の垣根の卯の花が咲いていい香りが流れ、ホトトギス

合唱 夏の歌3曲

A

が海を渡って帰ってきて、木の枝に止まって、「キョッキョ、キョッキョキョキョ。キョッキョ、キョッキョキョキョ」としきりに鳴きます。田んぼでは田起こし代かきも終わり、早乙女たちが稲の苗を植えるのがあちこちで見えます。夜には無数のホタルが、あちこちでゆつくりと光の線を引いて飛び交います。

夏といえば、海です。「我は海の子 白浪のさわぐ磯辺の松原に」：明治の終わり頃に出来た歌です。海のそばで生まれ、波の音を子守歌のように聞き、たくましい子どになり、強靱な体と精神を養って、この海の国を守っていくぞー」明治らしいたくましい歌です。

では、「ふるさとの四季」：「夏の歌」から、「茶摘」「夏は来ぬ」「われは海の子」をお聞きください。

⑤ 「茶摘」 作詞作曲ともに。

(1912年、明治、尋常小学唱歌第三学年用』が初出)

⑤ 茶摘

⑤ 茶摘

一、 夏も近づく八十八夜
野にも山にも若葉が茂る
あれに見えるは茶摘ぢやないか
あかねだすきに菅(すげ)の笠
二、 日和つづきの今日此の頃を、
心のどかに摘みつつ歌ふ
摘めよ摘め摘め摘まねばならぬ
摘まにや日本の茶にならぬ

三、 橘の 薫るのきばの
窓近く 蛍飛びかい
おこたり諫むる 夏は来ぬ
四、 棟(おうち)ちる 川べの宿の
門(かど)遠く 水鶏(くいな)声して
夕月すずしき 夏は来ぬ
五、 五月(さつき)やみ 蛍飛びかい
水鶏(くいな)鳴き 卯の花咲きて
早苗植えわたす 夏は来ぬ

⑥ 「夏は来ぬ」



⑦ 「われは海の子」



⑥ 「夏は来ぬ」 佐佐木信綱作詞、小山作之助作曲（189年、『新編教育唱歌集（第五集）』で発表）

⑥ 「夏は来ぬ」

一、卯の花の 匂う垣根に
時鳥（ほととぎす） 早も来鳴きて
忍音（しのびね）もらす 夏は来ぬ
二、さみだれの そぞぐ山田に
早乙女が裳裾（もすそ）ぬらして
玉苗（たまなえ）植うる 夏は来ぬ

⑦ 「われは海の子」 作詞者・作曲者ともに不詳。（1910年明 6年の文部省『尋常小学読本唱歌』に初出）

⑦ 「われは海の子」

一、我は海の子白浪の
さわぐいそべの松原に
煙たなびくとまやこそ
我がなつかしき住家なれ。
二、生まれてしほに浴して
浪を子守の歌と聞き
千里寄せる海の氣を
吸ひてわらべとなりけり。

三、高く鼻つくいその香に
不斷の花のかをりあり。
なぎさの松に吹く風を
いみじき樂と我は聞く
四丈餘のろかい操りて
行手定めぬ浪まくら
百尋千尋海の底
遊びなれたる庭廣し。
五、幾年こゝにきたへたる
鐵より堅きかひなあり。
吹く鹽風に黒みたる
はだは赤銅さながらに。

六、
浪にたゞよふ氷山も
來らば來れ恐れんや。
海まき上ぐるたつまき
起らば起れ驚かじ。
七、
いで大船を乗出して
我は拾はん海の富。
いで軍艦に乘組みて
我は護らん海の國。

「すばらしい夏の歌を、ありがとございました。…桜も終り、若葉の季節も、八十八夜も過ぎました。

みなさんの中には、茶摘をされた方がありますか…。

それじゃ、早乙女が裳裾を濡らして早苗を植えている姿を見た人がいますか？

私は見たことはありません。稲の苗なんて機械で一気に植えてしまう時代なんですから…でも、何故でしょう…毎年見ているような気がするのは…。もしかしたら、子供の時から歌ってきたなつかしい風景が私達の記憶の中に染み込んでいるからかもしれませんね」

「確かにそうかも知れませんが。先程、歌って頂いた童謡が作られたのは、明治や大正時代です。

百年以上も前です。その間に時代　　きく変わっています。でも歌詞はそのままです。春、夏、秋、冬…日本の四季から生まれる変化に富んだ美しい風景や人の営みが、日本の原型のように、歌の中にあるからかもしれませんね。

「祭り」も季節の変化のなかで行われた日本特有の行事です。豊かな実りを祈って行われる「春祭」や「夏祭り」。収穫に感謝して行われる秋祭り」…お店が沢山でたり、夜通し神楽が舞われたり、子どもたちにはとても楽しかったです。昔は学校は休みになりました。

では、「ふるさとの四季」…「秋の歌」から、「村祭」と「紅葉」を歌っていただきます。

その前に、みなさんへ質問です。現在島根県に「村」はいくつあると思いますか？…

昔は、温泉津村、馬路村、五十猛村、大田村、…大田も村だらけでしたよね…。現在島根の本土には「村」がつく地域は「ゼロ」です。…隠岐の島に一つ…「知夫村」が残っているだけです。

それぞれの村には神社があり鎮守の森があり、広場があり…そこは、子どもたちの遊び場でもありました。「村」は消えても、童謡「村祭」はこれからも歌われていくことでしょう。

では、秋の歌から「村祭」「紅葉」…　　つづいて「冬の歌」から「冬景色」と「雪」をお聞きください」

「ちよっと待って。「雪」の歌だけ最初をちよっと歌ってみて」

「なんて？」

B A B A B A B

「なんでもいいから、ちよつと歌つてみて」

「…ゆきやコンコン あられやコンコン ふつても ふ…」

「ストップ!…さっき、雪やコンコン 霰やコンコン、って歌ったよね。…コンコンって何のこと?」

「雪が降る音だろう?」

「ええ? 雪が、コンコン音を立てて降るのを聞いたことがある?」

「ははは、ないね。…なんでだろ…子供の時から雪が降る音だとおもってたよ…」

「実はね、調べてみたんだ。いろいろな説があつて単純じゃないんだけど、コンコンというのはね、

「来ム来ム」…「もつと降れ降れ」という気持ちを表したものが、変化していったんだそう。

滝廉太郎は、同じ曲で「雪やこんこん」という歌を残しているので、それを歌っている人もいるらしいよ。

いずれにしても明治時代の言葉が変化して歌われているというわけだ。

では「故郷の四季」から、「秋の歌」「冬の歌」を4曲つづいてお聞きください。

大田混声合唱団のみなさん、お願いします。

※対話について。男性か女性かによって然る表現にかえること。特に語尾。

⑧ 「村祭」 作詞：葛原しげる、作曲：南能衛、（明治45年尋常校3学年用）

⑧
「村祭」

⑧
「村祭」

一、村の鎮守ちんじゅの神様の

今日はめでたい御祭日

ドンドンヒヤラ

ドンヒヤラ

ドンドンヒヤラ

ドンヒヤラ

朝から聞こえる笛太鼓

二、年も豊年満作ほまんさくで

村は総出そうでの大祭

ドンドンヒヤラ

ドンヒヤラ

ドンドンヒヤラ

ドンヒヤラ

夜までにぎわう宮の森

三、治まる御代みよに神様の

めぐみ仰あおぐや村祭

ドンドンヒヤラ

ドンヒヤラ

ドンドンヒヤラ

ドンヒヤラ

聞いても心が勇み立つ

⑨ 「紅葉」

⑨ 「紅葉」 高野辰之 作詞・岡野 作曲 中野義見 編曲 (明治44年 小学校第2学年用)

⑨ 「紅葉」

一 秋の夕日に

てる山もみじ

こいもうすいも

数ある中に

まつをいろどる

かえでやつたは

山のふもとの

すそもよう

二 谷の流れに

ちりうくもみじ

波にゆられて

はなれてよつて

赤や黄色の

色さまざまに

水の上にも

おるにしき

⑩ 「冬景色」

⑩ 「冬景色」 作詞作曲ともに不詳。4分の3拍子（初出は1913 尋常小学唱歌教材第5学年用）

⑩ 「冬景色」

一、さ霧消ゆる湊江（みなとえ）の

舟に白し、朝の霜。

ただ水鳥の声はして

いまだ覚めず、岸の家。

二、鳥（からす）啼（な）きて木に高く

人は畑（はた）に麦を踏む。

げに小春日ののどけしや。

かへり咲（ざき）の花も見ゆ

三、風吹きて雲は落ち、

時雨（しぐれ）降りて日は暮れぬ。

若（も）し灯火（ともしび）の漏れ来ずば、

それと分かじ、野辺（のべ）の里。

⑪ 「雪」

⑪ 「雪」 作詞は、国文学者の武笠三。作曲者は不詳。（明治44年尋常小学校2学年用。『池の鯉』『案山子』

などの作詞も担当）

⑪ 「雪」

一、雪やこんこ 霰あられやこん

降つては降つては ずんずんつもる。

山も野原も 綿帽子わたばしかぶり、

枯木かれき残らず 花が咲く

二、雪やこんこ 霰やこんこ。

降つても降つても まだ降りやまぬ。

犬は喜び 庭駈かけまはり、

猫は火燵こたつで丸くなる。

A B C D A B C D A B C D C B A

「ありがとうございました。日本の秋と冬の懐かしい歌を4曲歌って頂きました。歌の前に、「雪やコンコン」論争がありましたけど、

皆さんは、「雪やコンコ、あられやコンコ」と歌っていましたか。

明治の小説家、有島武郎は小説の中で、「こんこんと大降りの雪が降る中を」と書いています。

「コンコンと水が湧く」とか「コンコンと眠る」といいますから、もしかしたら、

当時は、「コンコン」と「コンコ」が両方あったのかもしれませんがね。

さて、童謡で聞く「ふるさと」の四季」…忘れてはならない歌があります。

※次の文は、二人なら交互に朗読。人数によって朗読箇所を分担する。

多くの人たちが、ふる里を離れ、都会へ出ていきました。

日本の発展と繁栄は、そういう人たちによって支えられてきました。

志を抱いてふる里を離れ、夢を実現した人もいます。

志を抱いてふる里を離れ、夢が破れた人もいます。

壁にぶつかって挫折し、悩み、苦しみ、孤独の底に沈んだ時もあるでしょう。

悲しい時、泣きたい時、人が信じられない時もあるでしょう。

いつの日にか、いつの日にか、志を果たして…

ふる里は、澄み渡った空のもと、何も言わず昔のままの姿で、そこにある。

春、夏、秋、冬…季節ごとに美しい装いを見せる山山

あちこちで咲き香る季節の花、どこからともなく聞こえてくる鳥の声。

父母、祖父祖母、兄弟姉妹、友達、お世話になった数々の人たち。

みんなが待っている懐かしいふるさと…

⑫ 「故郷」



⑫ 「故郷」

作曲・岡野貞一 作詞・高野辰之 1914（大正3）刊行の「小学唱歌」に掲載

⑫ 「故郷」

二 いかにいます 父母

つつがなしや 友がき

雨に風に つけても

思いいずる ふるさと

三、こころざしを 果たして

いつの日にか 帰らん

山は青き ふるさと

水は清き ふるさと

合唱が終わると、礼をして退場
照明、フェイド、アウト。

（20250425）大田混声合唱団用 第一稿版 洲浜昌三